

## 40年目を迎えて益々面白くなってきた

築60年を超えて空室も目立ってきた木賃アパートをスケルトン・リフォームし、性能を格段に向上させつつ、1階の室用途を大胆に変えて新たなスタートを切った京都のプロジェクト。築50年が迫ってきた区分所有マンションの給排水設備の更新・更生、給湯設備の更新を図り、築100年まで利用できるようにすることを目指した千葉のプロジェクト。築150年の土蔵を居住用途に変えるにあたり、採光や通風の確保と居住空間としての豊かさの実現を狙って、塔状の増築を施した高山のプロジェクト。子世帯が戻ってきて、築50年の酪農家の住宅を、外の牛舎の環境改善、土間や通り庭等を用いた自然な境界形成等を狙った二世帯住宅に生まれ変わらせた豊橋のプロジェクト。亡くなった祖父が長年暮らした築60年超えの古民家を、現代的な性能向上策をうまく組み込みながら、孫世帯が大切に住み継げるようにした佐賀のプロジェクト。10年前に購入した築40年弱の中古マンションに長く住むことを決意し、緻密な設計上の工夫と余計な物をもたないライフスタイルとで、50㎡に5人家族が豊かに暮らせることを証明した東京のプロジェクト。そして、昭和30年代に開発されたニュータウンに45年前に建てられたごく普通の住宅に、耐震性や断熱性等の向上を施すとともに、間取りも伸びやかなものに変えたモデル・ハウスを、この町の住民やここに移り住みたいと思っている周辺住民に見てもらうことで、これからの住まいに不安を抱える人々に具体的な希望を与えようとした神戸のプロジェクト。

300以上の応募作の中から上位賞に選ばれた7プロジェクトだけを並べてみても、リフォームの内容、築年数を含む元建物の属性、建っている地域、リフォーム後に住む人たちの属性、かかった費用等、実に様々で共通点が少ない。そして、リフォームされた建物でのライフスタイルもそれぞれである。だから、リフォームは面白いし、「住まいのリフォームコンクール」は面白い。40年目を迎えて、益々面白くなってきた。

「面白い」を連発したが、新築に代わって、ここから先の住まいづくりの中心になってくるリフォーム＝ストック活用は、人間の豊かさの象徴的行為であり高次の精神活動でもある「遊び」としての性格が強まり、「面白さ」が一番の評価ポイントになってくると考えるからである。もちろん、建築士を初めとしてリフォームに関わる方々は大真面目だろうし、施主も大きな出費を覚悟してのことだから大真面目には違いあるまい。しかし、皆が暮らしていくに十分な量のストックが存在するこの日本にあって、そのストックを活かして新しい暮らしを展開していくのに、ただしかつめらしくやっていたのでは大きな機会損失だ。ストックの時代に相応しい遊び心が、もっともっとワクワクするリフォームに結実し、それらが集まってくる41年目以降のコンクールに期待したい。

第40回住まいのリフォームコンクール審査委員会  
委員長 松村 秀一